

「白雪姫」

「では、贈り物としてぼくに棺をくれないか。ぼくは白雪姫を見ないではもう生きていられない。ぼくは白雪姫をあがめ、たいせつにしたい」

王子がそういうと、やさしいこびとたちは王子の気持ちがあわかって、棺をくれました。王子は、召使いたちに棺をかつがせました。そのうちに、召使いたちがやぶに足をとられてよろめきました。そのひょうしに、白雪姫が飲みこんでいた毒のりんごがのどからとびだしました。すると白雪姫は生き返り、棺のふたをもちあげて身をおこしました。そして、

「まあ、たいへん、わたしどこにいるのかしら」といいました。

『語るためのグリム童話集3』小澤俊夫監訳／小峰書店

白雪姫は毒りんごが口から飛び出したとたんに生きかえって、何事もなかったかのようにしゃべっていますね。一瞬の出来事です。昔話はこうして、ストーリーを先へ先へと進めていくのです。

「仙人の教え」

「かあさん、すまないことをしてしまいました。とちゅうで、二つもたのまれごとができてしまい、仙人は、三つしかおしえてくれなかったものだから、母さんの目のことはきけなかったのです。またでかけてききますから、こんどはゆるしてください」と、あやまりました。それからすわって、ゆっくり道中の話を母親にきかせながら、

「これが石の玉で、これが大蛇の剣」といって、さしました。母親は、「どれ、どれ」といって、手さぐりで石の玉をさわかりました。すると、たちまち目がぼつちりあきました。

『日本の昔話5』小澤俊夫再話／福音館書店

母親の目は、すこしずつ回復して見えるようになるではありません。一瞬です。これは奇跡を感じさせますが、奇跡なのではなく、昔話ではあたりまえのことです。昔話はそのように語るのです。

「手なし娘」

山道をのぼっていくとちゆう、嫁は、あんまりのどがかわいたので、滝つぼで水をのもうとかがみました。そのとき、背中におぶっていたあかんぼうが、ずずつと、滝つぼの中におちかかりました。

「あつ」と思ったとたん、両手がでて、嫁はあかんぼうをだきとめました。

『日本の昔話2』小澤俊夫再話／福音館書店

感動的な場面ですね。

手が少しずつ伸びてきたり、片手ずつ出たりしたのでは、あかんぼうを抱きとめることはできません。手が出るとなると完璧に回復するのです。昔話の完全性ともいえます。このように、ありえないことでも、昔話なら当たり前のように起こります。そのように昔話は語るのです。

「かえるの王さま」

「ぼくもいっしょに寝かせてください。ベッドにあげてくれないと、王さまにいつけますよ」といいました。お姫さまはかっとなって、

「このきたならしいかえるめ、これでおとなしくなるだろう」とさげんで、かえるを力まかせに壁にたたきつけました。

ところが、壁から落ちてきたとたん、かえるは美しい王子になりました。

『語るためのグリム童話集1』小澤俊夫監訳／小峰書店

お姫さまがかえるをたたきつけたとき、聞いている子どもたちははっとします。でも、つぎの瞬間、かえるが王子になったとき、驚きとともにほんとうにうれしそうな顔を示します。形態の変化が一瞬にして起きる、その効果が実感できる場面です。

形態の変化が一瞬にして起きるのは、人間だけではありません。東西を問わず具体例はいくらでもあります。次の例を見てください。

「竜宮の青い玉」

「わたしは、竜宮からの使者でございます。きのうあなたが捕らえた鯉は、実は竜宮の王子さまだったのです。今日は恩返しのためにまいりました」と、ていねいに挨拶をしたのち、彼が何か呪文を唱えると、海がふたつに割れ、竜宮への道が現われた。漁師は彼について竜宮に行った。竜王も親切に迎えてくれた。

『朝鮮昔話百選』崔仁鶴編著／日本放送出版協会

魔法のような一瞬の変化ですが、語りたいたのは「呪文の力のすごさ」ではなく、「海が割れて道ができる」ことです。そしてさっさと竜宮へ行きたいのです。ストーリーを先へ進めるための一瞬の変化なのです。

「オーバーン・メアリー」

王子は、若者に別れをつけ、来たときと同じ道を帰っていきました。

ずいぶん歩いて暗い森までやってきました。王子は、包みが重くなってきたように思われたので、中を見てやろうと思いました。包みを開けたとたん、目の前にすばらしい

宮殿と庭園と果樹園が現れました。王子がびっくりしていると、森の奥から巨人があらわれ、

「とんでもない場所に家をたてたもんだなあ」といいました。

「こんなところにたてるつもりはなかったんだ」と、王子がいうと、巨人は、

「もし、この宮殿を包みの中にもどしてやったら、何をくれる」とききました。

「何がほしいんだ」

「そうだなあ、おまえの最初の息子だ。その子が七歳になったら、わしのものにする」

「ああ、もし息子が生まれたらおまえにやるよ」

王子がそういったとたん、宮殿は、庭園と果樹園もろとも包みの中におさまりました。

語りの森ホームページ《外国の昔話》